

第二次大戦後ベトナムにおける社会主義国家建設と知識人

(Kim Ngoc Bao Ninh, *A World Transformed: The Politics of Culture in Revolutionary Vietnam, 1945-1965*,

Ann Arbor: The University of Michigan Press, 2002.)

平山 陽洋

はじめに

1. 合衆国におけるベトナム研究

1-1. ベトナム研究の現在

1-2. 社会主義／ナショナリズム／脱植民地化とモダニティ

2. 社会主義体制下の知識人

2-1. 「クリエイティブな知識人」

2-2. 「新しい知識人」と「大衆」

おわりにーモダニティの経験を叙述することの意味

はじめに

本稿で紹介するキム・ゴック・バオ・ニン『変容する世界ー革命のベトナムにおける文化の政治学 1945-1965』（以下、『変容する世界』と表記）が出版されたのは2002年のことである。本書において著者のニンが試みているのは、1945年に独立して以降に樹立されたベトナムの社会主義国家体制のなかで、知識人たちが担った社会的な役割の変遷を、党が履行する文化政策や教育政策との関わりにおいて描き直す

作業である。実は2000年代に入って以降、合衆国のベトナム研究という知のフィールドから、近現代ベトナムの社会や文化を考察の対象とする研究書が相次いで世に出されている。2002年に出版された『変容する世界』もまた、そういった研究や出版の動向のなかに位置づけることができる。

本稿の目的は『変容する世界』の内容を紹介することにあるが、これに先立ってまず第1節において、合衆国のベトナム研究の新しい動向について概観し、そのなかでの本書の意義を明らかにしたい。この動向の担い手である研究者たちは、社会主義のイデオロギーが導入されたベトナムの歴史的文脈において、ナショナリズムがモダンに構築されていくダイナミズムに、考察の目を向けている。第1節では、かれらの考察のなかで共有される問題意識について、『変容する世界』の序論と結論を参照しつつ、「モダニティ」という視点から確認を行う。

これをふまえ、第2節においては、本書の本論で展開される議論を紹介する。第2節の冒頭で詳しく触れるように、著者のニンは、本論でふたつのタイプの知識人について論じている。

¹ ベトナムにおける「党」の名称の変遷は、以下の通りである。インドシナ共産党（1929年～）、ベトナム共産党（1930年2月～）、インドシナ共産党（1930年10月～）、インドシナマルクス主義研究者会（1945年9月～）、ベトナム労働党（1951年2月～）、ベトナム共産党（1976年12月～）。

ひとつは、フランス植民地期に西洋式のモダンな教育を受けた知識人であり、もうひとつは、独立後の社会主義国家ベトナムにおいて教育を受けた知識人である。階級主義のイデオロギーのもと前者が社会的なポジションを失っていき、逆に後者が同じイデオロギーによって新しい社会的カテゴリーとして創出されていくプロセスを、ニンは叙述している。本稿第2節において、ニンのこの叙述を丹念に追いかけて提示し、「おわりに」において、「モダニティ」という問題設定との関連から、その叙述の意義と限界を考える。

1. 合衆国におけるベトナム研究

1-1. ベトナム研究の現在

1990年代後半以降、合衆国のベトナム研究の世界において、新しい研究動向が生まれている。すなわち、ベトナムの近現代史を考察の対象としながら、その考察を行う際に、政治や経済の枠組みの変動を視野に入つつも、その枠組みの内部における社会や文化のダイナミズムに重点をおく研究動向である。とくにここ数年、研究者個人の単著や、複数の研究者によるエッセイ集が、年に一、二冊の割合ではあるのだが継続的に出版されており、この出版の状況を通して、新しい研究動向が形作られてきている様子を見て取ることができる。研究者個人の単著としては、本稿で紹介するキム・ゴック・バオ・ニン『変容する世界』（2002）以外にも、以下

の四冊がある。ピーター・ジノーマン『コロニアル・バスチーユベトナムにおける投獄の歴史 1862-1940』（2001）、ショーン・マラーニー『ベトナムにおける文化、儀礼、そして革命』（2002）、パトリシア・ペリー『ポストコロニアル・ベトナム—ナショナルな過去についての新しい歴史』（2002）、ショーン・マクヘイル『出版と権力—モダン・ベトナムの創造における仏教、儒教、そして共産主義』（2004）、である²。複数の研究者によるエッセイ集としては、1995年に出版された『ベトナムの過去へのエッセイ』が、先に挙げた四冊の研究書の先駆けとしての役割を果たしている³。この本には、ペリーやマクヘイルのエッセイも掲載されており、どちらのエッセイにおいても、後のかれらの単著につながる議論が展開されている⁴。2001年には、同様のエッセイ集として『記憶の国—社会

² それぞれ、Peter Zinoman, *The Colonial Bastille: A History of Imprisonment in Vietnam, 1862-1940* (Berkeley: University of California Press, 2001), Shaun K. Maloney, *Culture, Ritual and Revolution in Vietnam* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2002), Patricia M. Pelley, *Postcolonial Vietnam: New History of the National Past* (Durham and London: Duke University Press, 2002), Shawn Frederick McHale, *Print and Power: Buddhism, Confucianism, and Communism in the Making of Modern Vietnam* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2004)。さらに、マラーニーやマクヘイルの著作と同様、ホノルル大学から出版された、フィリップ・テイラーの著作『断片としての現在—ベトナム南部におけるモダニティの探求』もまた、このような出版傾向に加えることができるだろう。Philip Taylor, *Fragments of the Present: Searching for Modernity in Vietnam's South* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2000)参照。ただしテイラーは、合衆国の研究者ではない。かすしは、オーストラリア国立大学で人類学を学び、1992年から1994年にかけてホーチミン市に留学し、このときのフィールド調査をもとに、『断片としての現在』を書き上げている。

³ K. W. Taylor and John K. Whitmore, eds., *Essays into Vietnamese Past* (Ithaca: Cornell Southeast Asia Program, 1995)。

⁴ マクヘイルとペリーのエッセイは、それぞれ、Shawn McHale, "Printing and Power: Vietnamese Debates over Women's Place in Society, 1918-1934" (*Ibid.*, pp. 173-194), Patricia Pelley, "The History of Resistance and the Resistance to History in Post-Colonial Constructions of the Past" (*Ibid.*, pp. 232-245)。

主義ベトナム後期における過去』が出版され、こちらの本には、ジノーマンとマラーニーがそれぞれ寄稿している⁵。

近現代ベトナムの社会や文化を対象とする、このような研究や出版の動向を見渡してみると、そこにふたつの特徴を見出すことができる。ひとつ目は、先に挙げた五人の研究者たち自身に関する特徴であり、ふたつ目は、かれらの問題意識や研究対象に関するものである。

ひとつ目の特徴について、まず、かれら五人の研究者がみな、1990年代半ば以降に博士号を取得している点を指摘できる。『変容する世界』の著者のニンは、1996年にイエール大学で博士号取得論文を書き上げている。また、ジノーマン、ペリー、マクヘイルの三人は、1993年から1996年のあいだに、コーネル大学で博士号を取得している。一方、マラーニーは、1993年にミシガン大学で博士号取得論文を提出している。ただし、他の研究者がベトナム研究という学問領域に直接所属するのと異なり、かれらは文化人類学というディシプリンを専攻しており、みずからの研究のフィールドとしてベトナムの社会や文化を扱っている。

かれらはまた、博士号を取得する前後の時期にハノイ大学等ベトナムの研究機関に留学し、

ベトナムの現地の学者や知識人と知的な交流を重ねている。たとえば、1993年に博士号を取得し、2002年に『ベトナムにおける文化、儀礼、そして革命』を上梓したマラーニーは、1990年から1992年、1993年から1994年、1996年から1998年にかけての三度、ハノイでの留学を実現している⁶。『変容する世界』の著者のニンの場合は、1989年と、1991年から1992年にかけての二度、ハノイに滞在し研究を行っている⁷。

以上をまとめると、合衆国のベトナム研究の新しい動向の担い手である五人の研究者は、概して、1990年代半ばに博士号取得論文を書き上げており、その前後の時期にベトナムに実際に足を運んでいる。そしてそれぞれの研究の成果が、2000年代に入って単著として出版された。

かれらのこのような研究を可能にしたのは、1980年代末以降の政治情勢の変化である。1986年にベトナムにおいてドイモイと呼ばれる改革開放路線が採択されたことや、1989年にベトナム軍がカンボジアから撤退したことをふまえて、とくに1990年代に入ると、米越両国の関係が、経済関係を中心に徐々に改善されていた。さらに1994年には、合衆国の対ベトナム経済制裁（エンバーゴ）も解除され、1995

⁵ Hue-Tam Ho Tai ed., *The Country of Memory: Remaking the Past in Late Socialist Vietnam* (Berkeley: University of California Press, 2001). ジノーマンとマラーニーのエッセイは、それぞれ、Peter Zinoman, "Reading Revolutionary Prison Memoirs" (*Ibid.*, pp. 21-45), Shaun Malamey, "The Fatherland Remembers Your Sacrifice: Commemorating War Dead in North Vietnam" (*Ibid.*, pp. 46-76).

⁶ Malamey, *Culture, Ritual and Revolution in Vietnam*, p. xiv.

⁷ Kim Ngoc Bao Ninh, *A World Transformed: The Politics of Culture in Revolutionary Vietnam, 1945-1965* (Ann Arbor: The University of Michigan Press, 2002), pp. xv-xvi. (以下、本書を引用する際は、本文中で括弧内に頁数を表記する)。なお、他の三人については、それぞれの著作のなかで、ハノイで学んだ経験について言及があるものの、具体的な時期については明言されていない。

年には米越両国が正式な国交正常化を果たしている。合衆国にとってベトナムはもはや、安全保障やイデオロギーといった面において激しく対立する社会主義国ではなくなったのである。そして、合衆国の企業関係者や投資家がベトナムに進出していくのに並行して、アカデミックな研究者もまたベトナムの現地に赴くようになった。

オーストラリアのベトナム研究者であるフィリップ・テイラーは、1980年代末以降の時代について、「ベトナムが、資本主義の巨大な力の最後の犠牲者として、西洋化の波にまさに呑み込まれようとする」時期であると述べている⁸。合衆国の政治学者マーシャル・バーマンは、東欧で民主化革命が起こり、ソ連邦が崩壊した1989年を、「偉大なモダニストの年」と揶揄したが、社会主義の敗北と資本主義の勝利が謳われる国際的な政治情勢の変化のなかで、社会主義国であるベトナムもまた、『モダニティ』というグローバルな条件」に否応なく参入していったのである⁹。

そして、ドイモイ以降の市場経済の採用という歴史的な出来事を通して、「モダニティ」がベトナム国内にはじめて導入されたかのよう主張する議論が、1990年代に入って以降に現れるようになった。一部のエコノミストや旧南

ベトナム出身の海外在住ベトナム人たちの主張である¹⁰。さらにかれらは、ドイモイ以前のベトナムの歴史を振り返り、次のような見解を打ち出しているとテイラーは指摘している¹¹。

すなわち、ベトナムの「野蛮な共産主義者たち」が、歴史的に「モダニティ」を受け入れることを拒み、それを駆逐してきたとする見解である。

「共産主義者」たちにアンチモダニストのレッテルを貼るこのような歴史的見解にあっては、旧南ベトナムにおいて合衆国が展開した政策が、「モダニティ」をベトナムに移入しようとした試みだったとして再評価されることになる。1950年代や1960年代に、冷戦下の合衆国の南ベトナム介入において、ウォルト・ロストウやサミュエル・ハンチントンらの「近代化理論」に基づいたベトナム社会の「モダナイゼーション」が目指されたが、それが、1980年代末以降のベトナム社会の「モダナイゼーション」を先取りするものとして肯定的に理解し直されるのである¹²。しかし、第二次インドシナ戦争時の合衆国の南ベトナム介入をさえ正当化する傾向のあるこのような歴史的見解に同調し、ドイモイ以前のベトナムにおいて「モダニティ」など存在しなかったのだと断言することはできないだろう。むしろ、問われなければならないのは、1980年代末以降にグローバルに拡散する「モダニティ」とも異なり、また、1950

⁸ Taylor, op. cit., pp. 1-3.

⁹ Taylor, loc. cit. Marshall Berman, "Why modernism still matters" in: Scott Lash and Jonathan Friedman eds., *Modernity and Identity* (Oxford: Blackwell, 1990), pp. 33-58.

¹⁰ Taylor, op. cit., pp. 1-3, 5.

¹¹ Taylor, *ibid.*, p. 5.

¹² Taylor, *ibid.*, pp. 5-6, 202.

年代や 1960 年代の合衆国の「近代化理論」が前提とする「モダニティ」とも異なった「モダニティ」、テイラーが呼ぶところの「オルタナティヴなモダニティ」が、ベトナムの脱植民地化から国家建設に到る過程において、社会主義の名の下に模索された歴史のダイナミズムである¹³。

合衆国のベトナム研究の現在の新しい動向は、1980 年代末以降のこのような時代状況のなかから、それに付随するかたちで生み出されている。ベトナムがグローバル化の波に呑み込まれることがなければ、新しい研究動向の担い手たちがベトナムに赴き、みずからの研究を行うこと自体も不可能であったろう。しかしかれらは、テイラーほどはっきりと自覚的であるかどうかは別にして、「モダニティ」が一元的に世界を覆うかに見える現在の時代状況にあるからこそ、先に挙げたエコノミストや海外在住ベトナム人の歴史的理解に組することなく、ベトナムにおいて歴史的に「ローカライズ」¹⁴されてきた「オルタナティヴなモダニティ」のダイナミズムや多元性を、批判的な考察の対象として取り上げている。

もっとも、この研究動向のなかで扱われるトピックは、先に紹介した書籍のタイトルからも

明らかなように、非常に多様である。しかし、これらトピックの多様性を超えて、合衆国のベトナム研究の現在の新しい動向のなかから、ある共通の問題意識を抽出することができる。以下では、この研究動向のふたつ目の特徴として、研究者たちのあいだで共有される問題意識を、明らかにしたい。

1-2. 脱植民地化／社会主義／ナショナリズムとモダニティ

合衆国におけるベトナム研究の現在の新しい動向の担い手たち、先に挙げた五人の研究者が扱うトピックは多岐に渡っている。しかし、かれらはみな、社会主義とナショナリズムが結合した、ベトナムにおける脱植民地化の政治的プロジェクトを、あくまでモダンなものとして考察しようとしている。かれらと同時期にコーネル大学で博士号を取得したタヴェポルン・ヴァサヴァクルは、1995 年のエッセイ「ベトナム—正当化のモデルの変容」のなかで、「社会主義ベトナムにおける政治的正当性の分析」を行う際に、ある「仮定」を行うべきことを提唱している。「モダンで非伝統的なイデオロギーが、政治体制の正当性の基礎を成している」という「仮定」である¹⁵。彼女が提唱するこの「仮定」が研究の前提として共有されていることを、現

¹³ Taylor, *ibid.*, pp. ix-x. 冷戦時の「モダナイゼーション」をめぐる議論については、近代化理論や社会主義の諸理論以外にも、開発経済学などの展開をふまえつつ、広く論じられる必要があるだろう。この問題についての立ち入った議論は、稿を改めて論じる必要があるだろう。

¹⁴ Taylor, *loc. cit.*

¹⁵ Thaveeporn Vasavakul, "Vietnam: The Changing Models of Legitimation" in: Muthiah Alagappa ed., *Political Legitimacy in Southeast Asia: The Quest for Moral Authority* (California: Stanford University Press, 1995), pp. 257-289.

在の新しい研究動向のふたつ目の特徴として、まず指摘しておきたい。

しかし、彼女たち以前にベトナムの社会や文化について論じた研究者たちは、このような「仮定」を研究の前提としているわけではなかったとも、ヴァサヴァクルは述べている。かれらは、社会主義ベトナムにおける「政治的な正当性について考察する際に、ベトナムの『伝統』を、唯一のものではないにせよ、主要な分析要素として捉えていた」¹⁶のである。ニンもまた、

『変容する世界』の序論において、自分たち以前の研究者を「合衆国におけるベトナム研究の第一世代」(3)と呼び、かれらに対し、ヴァサヴァクルと同様の批判を行っている。かれら合衆国におけるベトナム研究の「第一世代」の研究者たち、すなわち、1960年代や1970年代にみずからの研究に着手した、デイヴィッド・マール、アレクサンダー・ウッドサイド、キース・テイラー、チュオン・ピウ・ラム、ジョン・ウィットモア¹⁷などの人物たちは、ベトナムにおける「革命のポリティクス」を分析する際に、「そのラディカルでモダンな側面を無視し、ス

タティックなものとしてそれを理解する見方を生み出してきた」のである(6)。かれらが抱いていた「ベトナム人共産主義者に対するイメージ」とは、「一般の人びとからかけ離れた、マルクス・レーニン主義の教条主義的信奉者」

(3) という硬直したものではなかった。かれらはむしろ、「ベトナム人共産主義者」に対して、「反植民地主義の伝統の正当な後継者」(*ibid.*)というイメージを重ね合わせていく。

「第一世代」の研究者たちに対するヴァサヴァクルやニンの批判を言い換えるなら、かれらは、ベトナムにおける脱植民地化の政治的プロジェクトを、近代以前から続くナショナルな伝統を継承するものとして、その歴史的に継続する変遷の過程を中心に理解しようとしたのである。それゆえかれらは、このプロジェクトが推進される過程において、社会主義やナショナリズムがモダンなものとして構成されていた側面を、無視はしないまでも軽視する傾向が強かった。

ベトナムにおける脱植民地化の政治的プロジェクトについて、「第一世代」の研究者たちが、伝統や歴史といった概念に比重をおいて理解しようとしたことには理由がある。1962年から1964年にかけて海兵隊員として南ベトナムに駐留し、その後隊を辞め、ベトナム研究の道に足を踏み入れたデイヴィッド・マールは、自身の従軍時に、南ベトナム民族解放戦線のゲリラ活動の力強さと、合衆国の対南ベトナム戦略

¹⁶ Vasavakul, *ibid.*, p. 259. 同様の批判として、以下を参照。Taylor, *op. cit.*, pp. 5-9.

¹⁷ ここに名を挙げたのは、『変容する世界』において触れられている合衆国のベトナム研究者たちである。それぞれの著作として、David G. Marr, *Vietnamese Anticolonialism, 1885-1925* (Berkeley: University of California Press, 1971), Alexander B. Woodside, *Community and Revolution in Modern Vietnam* (Boston: Houghton Mifflin, 1976), Keith W. Taylor, *The Birth of Vietnam* (Berkeley: University of California Press, 1983), Truong Buu Lam, *Patterns of Vietnamese Response to Foreign Intervention, 1858-1900* (New Haven: Council on Southeast Asian Studies, Yale University, 1967), John K. Whitmore, *Vietnam, Ho Quy Ly, and Ming (1371-1421)* (New Haven: Council on Southeast Asian Studies, Yale University, 1985).

の頓挫を肌身で感じた経験から、「ベトナムの共産主義者たち」について以下のように述べている。「1966年以降、わたしにとって、ベトナムの共産主義者たちは、もはやだまし討ちにしてお駆逐すべき敵だとは思われなくなった。実際、1967年に南ベトナムで博士号のための調査を行っていたときに、わたしは、共産主義者たちが勝利するだろうと感じたのである。というのも、かれらが、反植民地主義のナショナルな力強い伝統の後継者であると思われたからである」¹⁸。

フィリップ・テイラーは、1950年代や1960年代のベトナム研究において、冷戦下の合衆国の世界戦略や南ベトナム介入が、「近代化理論」をもとに正当化されたことに触れ、多くの研究者が「近代化理論」に抗して、「ベトナム共産党という反植民地主義の最も成功を収めた組織のなかに、ベトナムの伝統が脈打っていると信じ」ようとしたのだと述べている¹⁹。テイラーの説明をふまえるなら、ニンが呼ぶところの「第一世代」の研究者たちは、いわば、アンチ「近代化理論」の世代にあたる。かれらは、「近

代化理論」において前提とされる「モダニティ」への反発からも、研究対象としての「ベトナム」を、支配や侵略に抵抗する伝統を継承するナショナルな歴史の主体としてイメージ化していった。そして、このようなイメージ化の傾向にあっては、「ベトナム」をモダンに構成されたものとして理解する視点は弱くならざるをえない。

しかし、ニンも指摘するように、「第一世代」の研究者のなかで、マールは、1981年に出版された『試練のなかのベトナムの伝統 1920-1945』において、そのように「ベトナム」をイメージ化することを「連続テーゼ」と呼び、批判するようになる。マール自身の言葉を引用すると、「連続テーゼ」とは、「ベトナム人がまずフランス人に勝利し、次いでアメリカ人に勝利したのは、なによりも、伝統の力によるところが大きいと論じる傾向」²⁰のことである。だが、「ベトナムの共産主義者たち」について、元来は「連続テーゼ」と同様の見解を抱いていたマールが、「連続テーゼ」に対する批判的なスタンスをいったいどのように獲得したのか。

この点に関してマールは、「連続テーゼ」に基づく自分たちの研究において、「伝統の力が強調されることによって、植民地期(1859-1945)

¹⁸ David Marr, *Vietnamese Tradition on Trial, 1920-1945* (Berkeley: University of California Press, 1981), pp. xii-xiii.

¹⁹ Taylor, op. cit., pp. 5-9. 「近代化理論」に基づくベトナム研究として、テイラーは以下を挙げている。Robert G. Scigliano, *South Vietnam: Nation under Stress* (Boston: Houghton Mifflin, 1964), Bernard Fall, *The Two Viet-Nam: A Political and Military Analysis* (2nd rev. edn.) (London: Pall Hall, 1967). テイラーは、1950年代や1960年代に発展した合衆国のベトナム研究において、「1955年にベトナム共和国が成立したことによって、ベトナムは植民地主義から決定的に脱出したとされ、またこのベトナム共和国の成立をもって、ベトナムのモダニティの夜明けと表現する者もいた」と述べている。

²⁰ Marr, op. cit., p. x. ニンは、「連続テーゼ」が、合衆国と戦争を行う過程で築かれた、ベトナム国内における公式の歴史の物語を補強する役割を果たしたとも、述べている(239)。つまり、「連続テーゼ」は、1965年以降に「党が強調する社会主義的なネーションの物語」(244)と同様の歴史叙述を用意していったのである。

のベトナムで起こった大きな社会変容の歴史的重要性が過小評価されてきた」²¹と述べている。つまりかれは、「伝統の力」に力点をおいてベトナムの歴史について語る「連続テーゼ」によっては「過小評価されて」しまう時期、ないしは、解明しきれない時期として、ベトナムにおける「植民地期」を見出しているのである。かれは、「植民地期」のベトナムにおいて、モダニティが紆余曲折を経ながら模索されていく様相に、考察の目を向ける。そしてその考察を通して、「連続テーゼ」に対する批判的なスタンスが獲得されていく。たしかにマール自身は、「モダニティ」という用語を自覚的に用いているわけではない。しかし、合衆国の「帝国主義を非難したいという道徳的な願い」に基づいて「伝統の力」を強調する「連続テーゼ」に対して、『試練のなかのベトナムの伝統』のなかで、かれは批判的な姿勢を強める²²。

マールのこの「連続テーゼ」批判を引き継いで、ニンはかれの議論をさらに展開させる。彼女は、「連続テーゼ」がベトナムにおける「植民地期」についての考察を妨げるだけではないと主張する。それは同時に、「北ベトナムにおいて社会主義国家の建設が図られたことについての理解を誤らせもする」(5)。つまり、「連

続テーゼ」のパーспекティブを前提とした場合、1945年に独立して以降のベトナムにおいて模索され、制度化された、「国家や社会のモダナイゼーション」という「ラディカルな変容」

(239)のプロセスがもった歴史的な意義について、問い直すことができなくなるのである。テイラーは、この時期に、『モダニティ』の参照項が、フランスからソ連へと移行した」と述べ、そのような「参照項」の移行を経て、ベトナムの共産主義者たちが「自分たちの抵抗についてのヴィジョン」を確立していったのだと、指摘している²³。

ニンやテイラーは、1981年に「連続テーゼ」批判を前面化したマールとは違い、「モダニティ」という用語を、ベトナムの近現代史について考察するための鍵となる概念として、かなり自覚的に使用している。彼女たちは、先に述べたように、ベトナムが『モダニティ』というグローバルな条件」に参入する、1980年代末以降の時代状況のなかに自分たちがいるからこそ、ベトナムにおいて「オルタナティブなモダニティ」が模索された歴史を把握しなおそうと試みることができるのである。「近代化理論」の立場とも異なり、「近代化理論」へのアンチテーゼとしての「連続テーゼ」の立場とも異なり、さらに、1980年代末以降に世界を巻き込む「モダニティ」を擁護する立場とも異なった視

²¹ Marr, *ibid.*, p. viii.

²² マールは、具体的には、1920年代から1930年代のベトナムにおいて、知識人たちによって形成された言説を取り上げて論じている。そこでは、たとえば、植民地期に知識人たちが、ベトナムの過去を再構築していくプロセスが叙述されている。Marr, *ibid.*, pp. 362-365.

²³ Taylor, *loc. cit.*

点から、彼女たちは、ベトナムにおける「オルタナティブなモダニティ」の変遷の歴史を見つめ直している。

マールとニンによる「連続テーゼ」批判をまとめると、「連続テーゼ」を前提とする場合に考察が妨げられるのは、ベトナムにおいて「オルタナティブなモダニティ」が模索された、歴史上のふたつの時期である。第一に、マールが指摘するように、仏領インドシナにおいて反植民地闘争が繰り広げられた1920年代や1930年代、これはすなわち、脱植民地化の政治的プロジェクトの過程において、社会主義とナショナリズムのモダンな結合の下地が準備された時期である。第二に、ニンが指摘するように、ベトナムが国家としての独立を宣言して以降の、1940年代後半や1950年代、これはすなわち、社会主義とナショナリズムの結合が図られたうえで、国家や社会についての構想が練られた時期である。

合衆国における現在のベトナム研究の新しい動向の担い手たち、かれらにおいて、ヴァサヴァクルのいう「仮定」が、研究の前提として共有されていることについて、先に述べた。これはつまり、ベトナムの近現代史に対するかれらの問題意識が、マールの「連続テーゼ」批判後の地平にあるということである。そして、かれらはそれぞれ、ベトナムにおいて、「連続テーゼ」を前提とする場合に考察が妨げられる歴史上のふたつの時期に、批判的な考察の目を向

けている。

先述のジノーマンやマクヘイルは、マールと同様、1920年代や1930年代に焦点を合わせた研究を行うことで、植民地期のベトナムにおける「オルタナティブなモダニティ」を問い直しているといえる²⁴。一方、マラーニーやペリーは、1940年代後半や1950年代に焦点を合わせた研究を行うことで、独立後のベトナムにおける「オルタナティブなモダニティ」を問題化する²⁵。

『変容する世界』においてニンが焦点を合わせるのも、マラーニーやペリーと同様、1945年から1965年の時期である。ニンはこの時期について、「ベトナムの共産主義者がナショナリストの言説を捉えた後の時期、そして社会主

²⁴ ジノーマンは、フランスの植民地体制下の牢獄を、「モダニティの実験場」とは正反対の「モダニスト的衝動の欠如」の場であったとして特徴付け、そこにおける囚人管理の「でたらめなシステム」が、逆説的に、収容された政治犯たちのあいだで、モダンな「共産主義、ナショナリズム、反植民地闘争の成長を育む」ことになった事態に迫ろうとする。Zinoman, *The Colonial Bastille*, pp. 6-7 参照。一方、マクヘイルは、フランスの植民地体制下に成立した出版文化のなかに、儒教や仏教といった、ナショナリズムの言説とは異なった言説の影響力の大きさを読み取ることで、マールやジノーマンとは異なったやり方で「連続テーゼ」を批判しようとする。McHale, *Print and Power*, pp. xi-xii 参照。マクヘイルはむしろ、儒教や仏教の用語や価値観、およびそれへの言及が、絶えず知識人たちのモダンな言説のなかに回帰してくる様相を、描き出そうとする。とくに、McHale, *ibid.*, pp. 93-95, pp. 180-182 参照。またマール自身も、植民地期のベトナムの論考の集大成として、以下の著作を書き上げている。David Marr, *Vietnam, 1945: The Quest for Power* (Berkeley: University of California Press, 1995)。

²⁵ ペリーは、「ポストコロニアル」の社会状況下で、「政治的・知的エリートたち」によって築かれた歴史学というモダンな知の制度に焦点を合わせ、そこにおいてベトナムの過去が政治的に再構築されるプロセスを、明らかにしようとしている。Pelley, *Postcolonial Vietnam*, pp. 5-7 参照。またマラーニーは、「ベトナムの社会や文化を、公的なイデオロギーにそって作り直す」というこの時期のベトナム政府の試みが、ベトナムの農村の「人びとの生活のなかの文化的実践や儀礼の変遷」に与えた影響の大きさを、読み解こうとする。Malamey, *op. cit.*, p. xiii, p. 3 参照。

義国家建設のプロセスが開始された時期」と述べている (6) ²⁶。それではニンは、「社会主義国家建設のプロセスが開始された時期」における「革命のポリティクスのダイナミズム」(ibid.) についてどのようなトピックを取り上げ、考察を加えようとするのか。そして、そのポリティクスにおいて導入され、模索された「オルタナティブなモダニティ」の諸相について、彼女はいかに解明していこうとするのか。次節では、『変容する世界』の本論で展開される議論を紹介する。

2. 社会主義体制下の知識人

『変容する世界』のなかで、著者のニンは、1945 年にベトナムが独立して以降の時期における、社会主義体制下の知識人の役割や、かれらの議論の変遷について叙述し、考察を加えている。ニンは、知識人という用語について、以下のように定義している。「わたしは、知識人という用語を、文学・教育・文化工作に何らかのかたちで参与するひとを指し示すものとして用いている。このようなクリエイティヴな知識人たちは、詩人や小説家であったり、批評家であったり、戯曲家やエッセイストであったりする。かれらの多くは、1930 年代から 1940 年

代にかけての知的なシーンを代表する人物たちであり、革命期には、党のメッセージを人びとに伝える重要な役割を果たした。社会主義国家の内部においては、かれらは、新しい文芸・教育システム・文化を創り出すのに貢献している。わたしの研究がクリエイティヴな知識人たちに焦点を合わせるのは、かれらが、党の政策を推進することにおいても、それに反発することにおいても、率直な議論を展開したからである」(9)。「クリエイティヴな知識人 creative intellectual」という用語は、ニン独自の訳語であり、ベトナム語では「văn nghệ sĩ」である。これを漢字に変換すると「文芸士」となる。ニンは、かれら「クリエイティヴな知識人」の多くが、1920 年代以降にハノイなどの都市部において、フランスの、西洋式のモダンな植民地教育を受けて育ったエリート知識人であったという。そして、この時期に、「文芸士(クリエイティヴな知識人)」という概念カテゴリーは、調査や編集などの作業ではなく、クリエイティヴな創作を行うことを自認する知識人たちを意味する用語として、定着した」(53)。

ベトナムの近現代史について分析する際に、「クリエイティヴな知識人」たちの言説に着目したのは、『試練のなかの伝統』におけるマールであった。知識人たちの言説について、マールは 1945 年以前の言説を取り上げている²⁷が、

²⁶ 「1965 年を区切りとすること」については、ニンは、この年に、「合衆国のベトナム戦争介入が激化したことによって、ベトナム民主共和国が新しい段階に突入したためであり、また、この時期までに、社会主義国家としての特質がほとんど制度化されたためでもある」と述べている (6)。

²⁷ 註 22、註 24 参照。

ニンは 1945 年以降の言説を時系列にそって整理して論じている。『変容する世界』の構成は、1945 年を起点として、以下の通りになっている。

序 (Preface)

序論 (Introduction)

第一部 八月革命からディエンビエンフーまで：1945-54

1 章 文化政策の構築

2 章 知識人たちによる応答：1945-48

3 章 社会主義の方針へ向けて

第二部 社会主義国家建設：1954-65

4 章 知識人たちの異議申立：人文佳品事件期

5 章 文化革命の構造：文化省

6 章 教育と新しい知識人階層

結論

モダンな教養を身につけた「クリエイティブな知識人」について議論されているのは、1 章から 4 章にかけてである。1 章では、1945 年以降の党の文化政策の方針に、1930 年代や 1940 年代の知識人たちの議論が与えた影響について論じられている。2 章では、知識人たちが、1945 年の八月革命²⁸や、1946 年に始まった第一次インドシナ戦争を決定的なきっかけとして、ベトナム独立同盟会（ベトミン）²⁹に賛同し参

加していく際に抱いた、内面的な思いや葛藤が示されている。3 章では、1940 年代後半から、階級主義のイデオロギーに基づく国家建設と社会の組織化を目指した党が、ベトミンに参加する知識人たちの統制を強化していく様子が描かれる。4 章では、まず、第一次インドシナ戦争終結後に、党の統制に対して、一部の知識人たちの反発が表面化していく過程が明らかにされる。次いで、1956 年に、新聞『人文』、雑誌『佳品』誌上でかれらが展開した議論の紹介がされる。さらに、党がこの出来事をきっかけに、1957 年から 1958 年にかけてかれらへの統制と再教育を徹底して行うことで、「知識人のコミュニティ」（160）の、党に対する自律性が失われていく過程が示される。

5 章と 6 章では、「クリエイティブな知識人」への党の統制が 1958 年を頂点に制度的に確立されていくのに並行して、文化省や教育省によって履行された政策が、取り上げられる。5 章では、1955 年に、「労働者階級」という「大衆」の「文化水準を高め」、「民族文化を建設する」（166-169）目的で創設された文化省の活動が、同省の内部資料の読解を通して明らかにされている。文化省の活動は、党の階級主義のイデオロギーとの関係から、1957 年まで迷走し、逆に、1958 年以降に活性化されるが、このことの意味がこの章で問われている。6 章では、1945 年から 1965 年の時期にかけての教育省の政策方針の変遷が示されている。とくに、高等教育

²⁸ 日本の連合軍への降伏をきっかけとする、ベトミンによる全国武装蜂起。ベトミンとは、階級や職業の違いを超えて、広範囲の人びとを動員するために設置された民族統一戦線組織のことである。

²⁹ 註 28 参照。

の場において、階級主義のイデオロギーに基づいて、植民地教育から切り離れた「新しい知識人」(204)の創造が目指された過程が描かれている。

以下では、本書の構成にそって、まず、「クリエイティヴな知識人」と党との関係の変遷についての、1章から4章にかけての議論を紹介し、次いで、「大衆」や「新しい知識人」をめぐる文化省や教育省の政策についての5章と6章の議論を取り扱う。なお、序論や結論については、本稿第1節ですでに論じているため、ここでは取り上げない。

2-1. 「クリエイティヴな知識人」

「クリエイティヴな知識人」に対する、党による公式の文化政策の端緒を成したのはふたつの文書であったと、ニンは述べている。ひとつは、党の重要な指導者のひとりであるチュオン・チン(Truong Chinh)が、1943年にフランス植民地体制下で地下出版によって刊行した「ベトナム文化大綱 Đề cương về Văn hoá Việt nam」である。もうひとつは、同じくチュオン・チンが、1948年に第二回全国文化会議で報告した「マルクス主義とベトナム文化の問題 Chủ nghĩa Mác và Văn hoá Việt nam」である。

「ベトナム文化大綱」において、チュオン・チンは、フランスの植民地支配と日本の仏印進駐によってベトナムの文化が危機に直面していると述べ、「新しいベトナムの文化を導くた

めの三つの原則」として、「民族化」、「大衆化」、「科学化」という概念を提唱している。ニンは、「新しいベトナムの文化」を規定するこれらの概念が、1930年代や1940年代に、都市部の知識人たちのあいだで展開された議論をふまえて、かれらのベトミンへの協力を引き出すために打ち出されたとする。

1930年代前半に、世界恐慌後の社会混乱のなか、「自力文団 Tự Lực Văn Đoàn」という文芸集団を中心に、西洋式の「モダンな個人の生活を強調し、家族や社会の過去の伝統に反対する」(23)社会運動が展開されたが、1940年代に入るとその運動も停滞し、知識人たちは、「植民地ベトナムにおける生活のなかで圧殺される個人」(31)として、「モダンな自己」(23)を認識するようになる。かれらは、西洋式のモダニズムや個人主義を称賛する過程で一度は否定した「過去」や「民族」、そして「共同体」(24-26)といった概念を再評価していく。「過去」や「民族」については、『知新 Tri Tân』、

『清議 Thanh Nghị』などの雑誌を中心に、ベトナムの過去の歴史や民族的価値を掘り起こす作業が進められる。「共同体」については、ヴー・チョン・フン(Vũ Trọng Phụng)、グエン・コン・ホアン(Nguyễn Công Hoan)、ゴ・タット・ト(Ngô Tất Tố)、ホアン・ダオ(Hoàng Đạo)ら「批判的リアリズム」の作家たちの文学作品を通して、1940年代前半の日仏二重支配下の社会に生きる「大衆」(33)の悲惨な生活

状況に、知識人たちの関心が向けられていく。悲惨な生活を送る「大衆」は、また、苦境のただなかにある「民族」の現在の姿としても認識される。ニンは、「ベトナム文化大綱」における「民族化」、「大衆化」という概念が、1930年代から1940年代にかけての、このような知識人たちの議論の変遷に対応すると同時に、それに対して「ガイドライン」、すなわち行動の指針を提供するものであったと述べている。一方、「科学化」という概念については、それは知識人たちにとって、儒教における伝統的な世界像とは異なる、「合理的な思考に基づく全く新しい世界像」を提供し、「新しい世代の人間の思考が古い世代の人間のそれを克服」(ibid.)する可能性を示唆するものであった。

党による公式の文化政策の端緒を成したもうひとつの文書である「マルクス主義とベトナム文化の問題」が発表されたのは、1948年のことである。1943年から1948年の期間に、ホーチミンが、八月革命を経てベトナムの国家としての独立を宣言し、旧宗主国のフランスと、独立を宣言したばかりのベトナムとのあいだで、第一次インドシナ戦争が勃発している。八月革命以降の党の基本的な政治方針は、階級闘争の必要性を中心に据えつつも、民族解放闘争を維持するというものであった。それゆえ、「マルクス主義とベトナム文化の問題」においても、「唯物論的弁証法」に基づく「マルクス主義の文化的立場」(39-40)が明確に打ち出されなが

ら、同時に、「ベトナムの文化的な過去と現在についての公式の見解」(42)が示されたのだと、ニンは述べている。しかしチュオン・チンは、ベトナムの歴史について、長らく中国やフランスに支配されてきたことを示す、否定的な叙述を行っている。それゆえ、「かれが、ベトナムの傑出した文化的遺産、ベトナムの豊かな大衆文化、ベトナムの不屈のナショナル・アイデンティティを称賛しているにもかかわらず、かれのベトナムの文化についての見解は、暗く悲観的なものでさえあった」(ibid.)。しかしまたチュオン・チンは、「中国にもフランスにも影響されないベトナムの純粋な民族の本質」を、歴史的な過去や現在に拘束されない非常に「観念論的」なものとして強調しもある(45-46)。その場合、「観念論的」に強調される「民族的本質」は、「歴史の法則や唯物論的弁証法」に、必ずしもそぐわないものになってしまう(ibid.)。つまり、チュオン・チンにおいて、「ベトナムの純粋な民族性」が強調される場合は、それは「歴史の法則や唯物論的弁証法」の原理に抵触してしまい、逆に、後者が強調される場合は、前者が「暗く悲観的に」語られることになる、ニンはいう。

八月革命や、第一次インドシナ戦争の勃発は、多くの知識人たちのベトナムへの参加を促す、非常に大きなきっかけであった。「マルクス主義とベトナム文化の問題」は、そのような知識人たちに向けて発表されている。それは、「時

代の精神」に応じ、「民族と大衆の名の下で」、「勇敢で新しい世界を建設する」(45) 作業に参加することを、「プチブル階級」(69) 出身のエリート知識人たちに要請するものであったと、ニンは述べている。エリート知識人たちのなかで、マルクス主義の文芸批評家であるダン・タイ・マイ (Đặng Thái Mai) や、党から「トロツキスト」のレッテルを貼られたチュオン・ティウ (Trương Tửu) は、八月革命以前にすでに、「社会における知識人の役割」(60) について論じていた。八月革命のインパクトを受けて、元来は「自力文団」に近い場所にいた文芸批評家のホアイ・タイン (Hoài Thanh) は、「知識人は、新しいベトナムにおいて歩むべき唯一の道として、大衆とひとつにならなければならない」(66) と考えるようになっていた。あるいは、第一次インドシナ戦争勃発後に、詩人のグエン・ディン・ティ (Nguyễn Đình Thi) は、戦争という事態を決定的なきっかけとし、戦争に参加して犠牲になる「普通の人びと」と自らとの「完全な統一」(69-70) を図るための方法論として、「社会主義リアリズム」という文芸手法を開拓しようとする。この時期の知識人たちと党との関係について、ニンは次のようにまとめている。「民族の過去の文化や遺産を守るのではなく、それを破壊することによって、モダンな世界にベトナムを新生させようという目的を共有する点において、共産主義者と、知識人のコミュニティの多くの人間とが、一体

となって協力する力強い契機が存在した」(240)。

しかし党は、これら「クリエイティヴな知識人」たちの組織化と管理を目指していく。1949年には、秋・冬の軍事大攻勢を目前に控え、9月25日から28日にかけて、越北文芸討論会議が開催されている。この大攻勢は、人びとにさらなる犠牲を要求するものであった。それゆえ、「抵抗に必要な犠牲を引き出すために、人びとを鼓舞するツール」(89) として知識人を利用するという目的のもと、かれらとかれらの行動への管理が強化されたと、ニンはいう。越北文芸討論会議では、この頃からチュオン・チンとともに党の文化政策の代表的な担い手となったトー・ヒウ (Tô Hữu) が、従来強調された「民族」という概念に変わって、「社会集団」(*ibid.*) としての人びとを意味するための用語として、「人民」という概念を用いている。『民族』という用語が感情的なトーンを帯びたものであり、それゆえ政治的立場の違いを超えて人びとを効果的に統合するのに対して、感情的なトーンの薄い『人民』という用語は、階級路線の方向へと議論を展開するために用いられている」(90)。つまり、「民族」という概念に代わって「人民」という概念が使用されることで、民族解放闘争路線から階級路線への「革命のポリティックスの路線転換」(*ibid.*) が図られた。そして、階級路線に基づいて建設が目指される国家の「望ましい内部的秩序」(*ibid.*) のなかに、

知識人たちが位置づけ直されていったのである。

越北文芸討論会議以前の段階で、すでに、ハノイなどの都市部で生活を送ってきた経歴をもつエリート知識人たちは、「社会における知識人の役割」や、「知識人」と「大衆」との距離の問題を問うようになっていた。かれらは、「植民地主義の重荷を背負わされ死に行く農民たち」に対して、「激しい罪悪感」を感じていたことを、ニンは指摘している (92)。この「罪悪感」によって、「知識人たちが、自分たち自身や自分たちの過去の経歴を批判し、党が提供する新しい社会についてのヴィジョン、すなわち、労働者と農民が指導的な立場に立つとされる社会についてのヴィジョンを受け入れることが、促された」(93)。

越北文芸討論会議が開催された数日後の 10 月 1 日には、中華人民共和国が成立しており、トー・ヒウもまた、国家建設の際にモデルとすべき「新しい民主国家」(89)として、特に中国に言及している。1950 年代前半には、党の政策において、批判と自己批判、政治教育などの概念が強調され、土地改革や、党組織や国家組織の整風運動を通した政治闘争が導入される。そして、新しい社会組織を確立する過程で、「集団」の「イデオロギー的純潔」が追求された (105)。ここに、「中国というモデル」(*ibid.*)の影響があるのは、明らかであるだろう。しかし、この時期の「革命的な熱狂」(101)をもた

らしたのは、たんに、新生国家の中国の政策が、先進的な社会主義政策のモデルとしてベトナムに導入されたことだけによるわけではないと、ニンは述べている。「植民地主義の残存する影響」(105)を拭い去ろうとする党幹部たちの強い思いがあったからこそ、植民地ベトナムの宗主国であったフランスとの戦いが展開されるまさにそのときに、「集団」の「イデオロギー的純潔」の追求が推進されたのである。「組織が、望ましくない要素に少なからず汚染されており、それゆえ、組織の確立を図らなければならないとする厳しい自覚が伴われることによって、『政治闘争』という平凡な用語の裏側に、緊迫した焦燥感が埋め込まれたのである」(*ibid.*)。

人びとを動員するための組織として、学校や合作社、各種大衆組織が整備されたのも、この時期のことであった。ニンは、1950 年代前半のベトナムの社会全般について、以下のように述べている。「人民の自由を確保するという理想や、新しく正しい社会を創設するという理想の獲得が、多くのベトナムの人びとの血を流すことによって目指された。しかし、これらの理想は非現実的な目論見に過ぎず、それゆえ、パラノイア的に自己を正当化するスローガンや政策、そして指示が、大量に生産されることになった。結果としてもたらされたのは、神経過敏な社会である。そこでは、『敵』を示す徴候が絶えず詮索され、人びとの日常生活における小

さな楽しみでさえも価値が認められなかった」(146)。とくに、1954年のディエン・ビエン・フーの戦いによって、ベトミン軍がフランス軍に決定的な勝利を収めたにもかかわらず、ジュネーブ協定において南北ベトナムが分断されるという状況になって以降、かつてはフランスに協力し、現在は南ベトナムや合衆国に協力する「敵」が、「顔の見分けもつかぬまま遍在する」という現状認識がもたらされた。そして、この認識に基づいて、「党の村レベルへの支配の強化と党機関の純化」が目指されたのだと、ニンは述べている(124)。

「クリエイティブな知識人」たちは、このような文脈において、「プチブル階級」という出自や、植民地期に教育を受けたという経歴を、厳しく非難されていった。第一次インドシナ戦争が激化する1951年の秋には、中国に留学した党幹部たちにより、知識人を対象とする、はじめての整風キャンプが招集された。自殺者や行方不明者を出したこのキャンプにおいて焦点となったのも、知識人たちが、「社会的な目的を欠落させていること」(115)であった。かれらはとくに、1945年以前に発表した文学作品において社会的責務の自覚が欠如していたとして、自己批判を強いられた。自力文団の担い手だったテー・ルー(Thế Lữ)やスアン・ジエウ(Xuân Diệu)だけでなく、植民地期の批判的リアリズムの代表的人物であり、八月革命後には一貫してベトミンに協力してきたト

ー・ホアイ(Tô Hoài)もまた、このキャンプで激しい批判と自己批判に晒された。

1950年代の北ベトナムに現出した「神経過敏な社会」において、党による「クリエイティブな知識人」の管理が強化される一方で、そういった党の方針に対して、かれらの不満が高まっていく。知識人に対する党の管理方針に最初に反発したのは、人民軍の軍隊内文芸局に所属していた「軍隊知識人」(126)たちであったと、ニンは述べている。チャン・ザン(Trần Dân)やホアン・カム(Hoàng Cầm)、トゥー・ファック(Từ Phác)などの「軍隊知識人」たちは、1945年以前にフランスの植民地教育を受けているが、他の「クリエイティブな知識人」とは異なり、1930年代や1940年代にはほとんど創作活動を行っていない。かれらは1940年代末に、第一次インドシナ戦争が激化するなか軍隊に入隊している。また、1950年代初頭には中国に留学し、「整風の技術」(127)を学んでいる。かれらは元来、軍隊において養成されたエリート知識人であり、「革命の忠実な子どもたち」(113)であったと、ニンはいう。そして、かれらが本格的な創作活動を開始するのは、第一次インドシナ戦争が終結した1954年以降のことであった。たとえば、自他共に認める「毛沢東主義者」(127)であったチャン・ザンは、フランス軍に対して決定的な勝利を収めたディエン・ビエン・フーの戦いを主題として、長編小説の「脈打つ人波 Người người lớp lớp」を

書き上げている。「多くの普通のベトナム人が、英雄的にこの戦いに参加した」(129) ことを情熱的に描き出したチャン・ザンは、一方で、「新しい文芸の内容と形式」(131) の名のもとに党が提示するステレオタイプの文学的描写に対し、激しい嫌悪感を抱いていたと、ニンは述べている。たとえば党指導者のひとりであるトー・ヒウの詩集『越北 Việt Bắc』に対し、かれは、「くだらない愛憎表現しかない」(*ibid.*) という厳しい評価を下している。

かれら「軍隊知識人」たちは、チャン・ザンを中心に、1955年2月に、軍隊の厳しい規律に反発し、かれらの直属の上司である軍隊政治総局局長グエン・チー・タイン (Nguyễn Chí Thanh) に対し、創作活動の自由を要求している。タインはこの要求を厳しく一蹴したと、ニンは述べている。同年、チャン・ザンやトゥー・ファック、ホアン・カムの三人は、軍規を破った恋愛騒ぎを起こし、チャン・ザンとトゥー・ファックは自己批判の役務に服し、ホアン・カムは軍を除隊している。

自己批判の役務に服し、執筆活動を禁じられているはずのチャン・ザンの詩が、かれの知人たちの手により、1956年1月に私企業の明德出版社 (Minh Đức Xuất bản) より刊行された雑誌『佳品 Giai phẩm』春季号に、本人の許可なく掲載された。『佳品』春季号は、旧正月を祝うと同時に、「党と革命への信念」(137) を謳う内容であったが、チャン・ザンの作品が掲載

された事情によって、ホアイ・タインやグエン・ディン・ティなど、当時の党の文芸政策幹部たちから、激しい批判を浴びせられる。ニンはまた、この時期に党が、出版業界への管理を強めたことを指摘している。しかし、この事件を理由に逮捕されたチャン・ザンが自殺を図ったことを受け、党文化政策幹部たちも、自分たちの批判の行き過ぎを認め、チャン・ザンへの謝罪を表明することになった。

知識人たちに対する党の管理政策方針の軟化と並行して、同年9月以降に、『佳品』秋季号や、新聞『人文 Nhân văn』が順次刊行されていく。ここでは、「軍隊知識人」に留まらない多様な知的背景をもつ「クリエイティブな知識人」たちが、党や国家の組織のあり方について論じたエッセイを寄稿している。党とは一貫して距離をおいてきたマルクス主義文芸批評家のチュオン・ティウや、マルクス主義歴史家のダオ・ズイ・アイン (Đào Duy Anh) は、「党組織の直接的な指導性」への批判を行い、「現行の知識人の組織の再検討」(151) を求めている。フランスから帰国し党に協力していた哲学者チャン・ドゥク・タオ (Trần Đức Thảo) や、法学者のグエン・マイン・トゥオン (Nguyễn Mạnh Tường) は、「法のシステム」等の整備に基づいた「現在のものとは異なる組織構造の必要性」(152) を主張している。「チャン・ザンに対してなされた公的対応があまりに酷かったこと」をきっかけとして展開された「知識

人たちの議論において、組織変革の必要性に焦点が当てられた」と、ニンは述べている (161)。

『佳品』や『人文』における知識人たちの議論の背景として、ニンは、国際的な政治情勢と国内の社会情勢について触れている。国際的な政治情勢については、1956年2月のソ連共産党第20回大会におけるスターリン批判や、同年5月に中国において提唱された「百花斉放・百家争鳴」が、知識人たちの議論に影響を与えたと、彼女は述べている。国内の社会情勢については、1950年代前半の「神経過敏な社会」への反省が知識人たちの議論を導いたことが、指摘されている。

党組織や国家組織の拡大と整備が急ピッチで展開された1950年代前半の「神経過敏な社会」において、一方で、「集団」の「イデオロギー的純潔」が目指されたが、それにもかかわらず、他方で、「党に政治的な権力が集中した結果、党と大衆とのあいだを媒介する立場を主張する人びとが台頭することになった」(145)。このような立場を取った人びとは、「『組織』、『人民の観点』、『階級的立場』、『公的政策』などの支配的な言説の用語を操る術を身につけて」おり、権力への「危険な寄生者」と化していたにもかかわらず、党組織にとって「欠くことのできない必要な要素」となっていた(145-146)。

1956年には、党の側でも、そういった「神経過敏な社会」の現状を問題化し、たとえばチュ

オン・チンが土地改革の行き過ぎを認め、党書記長の座を降りている。『人文』や『佳品』で展開された議論もまた、全般的にいて、そういった当時の問題意識を共有するものであった。たとえば、『人文』秋季号第二号において、詩人のフン・クァン (Phùng Quán) やヒイウ・ロアン (Hữu Loan) が、党組織や国家組織の担い手たちの「腐敗と墮落」(146)を糾弾している。「多くの知識人たちにとって、イデオロギーとは、現行の国家構造に適合するものではなくなくなってしまっていた。かれらは、自分たちこそが、革命の遺産が崩壊するのを防ごうとしているのだと考えていた。そして、公に自らの意見を表明することによって、かれらは、自分たちと国家との関係自体を、より良いものに変化させようとしていたのでもある」(161)。

1956年に展開された知識人たちの議論は、党による『佳品』と『人文』の廃刊後、1957年に設立された作家協会 (Hội nhà văn) の文芸新聞『文 Văn』に引き継がれるものの、1958年には『文』も廃刊処分となる。同年、『人文』と『佳品』の寄稿者に対する責任追及や公職追放もなされている。そして、ニンは、「1958年以降、知識人とは国家の従僕であり、文化とはイデオロギー闘争における武器であるとする見解が、すべての知的・文化的活動の基本的な骨子となった」と述べている (163)。「クリエイティブな知識人」たちが、「革命のポリティクスと社会主義のイデオロギー」によって「み

ずからの創作活動と社会的な役割の創造的な統合を感じることができた希有なとき」(244)は、もはや過ぎ去ったのである。このように、『佳品』、『人文』、『文』が発刊された1956年から1958年にかけて、フランスの植民地教育を受けた「クリエイティブな知識人」たちへの統制が決定的になっていく一方で、階級主義のイデオロギーにそった「大衆」の教育や、「新しい知識人」の養成が目指されていく。以下では、「大衆」や「新しい知識人」をめぐる、『変容する世界』の5章と6章におけるニンの議論を紹介する。

2-2 「新しい知識人」

第一次インドシナ戦争が終結したばかりの1955年に、「大衆の文化水準を高め」、「民族文化を建設する」(169)目的で、文化省が新設された。ここで用いられる「文化」の意味は、非常に広義のものであったと、ニンは指摘している。たとえば、1956年5月に開催された文化会議において、トー・ヒウは、「文化の意味」について、次のように定義している。「文化の意味は、非常に広義なものであり、医学、教育、社会、文学、芸術、そして科学など、人類の知的生活に属するあらゆる活動を意味する」(166)。トー・ヒウの「文化」に関する見解について、ニンは、それが、「文化のエリート的要素を拒絶」し、「労働者階級」の「大衆文化」を強調するものであったと述べている

(167-168)。しかし、実際に「新しい文化の『大衆的』な側面によって強調されたのは、国家が用意する公共の目的に、大衆が参加することであった。そして、過去の伝統や文芸形式、儀礼や文化的実践を維持することは、軽視された」(*ibid.*)。

1955年当時のベトナムの社会においては、「経済的な成果」を上げることが優先的な「公共の目的」として設定されていたため、冠婚葬祭の儀礼や祭りなどの村落の文化的実践が、そのような「公共の目的」の達成を妨げる「迷信的慣習」(*ibid.*)として、禁止されていた。また、「道路と堤防を建設する熱狂」(176-177)のなか、歴史的な遺産や、仏教寺院やキリスト教教会などが破壊された。

このような時代状況において文化省は、「新しい文化の建設」の名の下に、「大衆」の「文化レベル *trình độ văn hoá*」(168)の向上を目指して、「都市や農村における識字教育、健康教育、図書館の設立、展示会や映画会、ライブパフォーマンス」(201)などの「文化工作」を履行した。しかし、「社会経済活動」(173)と異なり、「文化工作」には明確な役割や積極的な意義が与えられなかったと、ニンは述べている。それゆえ、「大衆の参加や緊急の問題解消を重視する新しい国家の姿勢と、文化省が長期的な視点から、文化の発展のために重要だと考えたことが、齟齬をきたしたのである」(180)。実際、文化省初代大臣であるホアン・ミン・ザ

ム (Hoàng Minh Giám) は、1958 年に、文化の「普及と向上という問題 *vấn đề phổ cập và đề cao*」(179) に対して、文化省が有効な解決策を打ち出すことができなかったと、報告を行っている。

1957 年まで自分たちの「文化工作」に意義を見出せずにいた文化省の幹部たちに対して明確な役割が与えられるのは、1958 年のことであったと、ニンは強調する。この年に、文化省の内部資料として、「過去三年 (1955-1957) の文化工作の批判的検証と、来る三年 (1958-1960) の文化工作の方向性の提示 *Kiểm điểm công tác văn hoá trong ba năm qua (1955-1957) và hướng công tác văn hoá trong ba năm tới (1958-1960)*」という名の報告書が作成されている。この報告書について、そのなかで、1957 年以前の「文化工作」に対して、「文化が階級闘争の武器であることが認識されていなかった」(185) と反省が加えられたと、ニンはまとめている。さらに、1958 年以降の「文化工作」の「方向性」として、「労働者階級」や「プロレタリアート」といった「大衆」が、「究極的には社会における文化の創作者となる」(186-187) よう教育するという目的が確認された。つまり、能動的に社会に参与する人間として、「労働者階級出身の新しい知識人を生み出すこと」(186) が、「文化工作」の目的として、1958 年以降に目指されたのである。

1958 年以降には、「思想革命」や「文化革命」

という概念が、「新しい技術に基づく自己解放」、「技術の革新と改善」や「生産増大」(195) という概念と密接に関連づけられて、用いられていく。1958 年の内部資料において、当時の文化省副大臣であったクー・フイ・カン (Cù Huy Cận) は、「今日の北部ベトナムにとって、生産こそが主たる戦線である」(191) と強調している。実際、文化省の「人びとのもとへ入っていくキャンペーン」(188) ³⁰において、「農業暦」にあわせた「文化工作」が図られ、文化官僚たちは、1950 年代前半の土地改革の傷痕の残る各農村において、「自然、組織、イデオロギーの諸特徴」を調査・評価し、その調査結果に基づいて、「生産の必要性を満たすために何を変え、何をなさねばならないか」を決定していった (195)。かれらは、農民たちが、合作社に参加する前の段階として、「互助組 *tổ đội công*」を組織することを促した。さらに、文化省の「文化工作」全般において、人びとに対して、「政治教育」に「職業訓練」が伴われるべきことが強調された (187)。

一方教育省において「実益性」(213) を重視する「職業訓練」が強調されたのは、1956 年の教育改革以降のことであった。この教育改革に先駆けて、チュオン・チンが、教育省副大臣の

³⁰ ニンは、英語で「Going-down-to-the-People Campaign」という語を用いているが、ベトナム語で統一した表現はない。「*tham gia lao động* 労働参加」「*văn nghệ sĩ đi thực tế* クリエイティヴな知識人が実践を経験すること」「*công tác văn hoá ở cơ sở* 基礎単位における文化工作」等の表現が用いられている。

グエン・カイン・トアン (Nguyễn Khánh Toàn) を、1954 年 9 月に中国に派遣している。グエン・カイン・トアンは、元来、「教育計画の明確な一貫性よりも、個々人の考えの集積によって教育システムが運営されるべき」と考えていたが、中国滞在時に、「ソ連からの影響の大きい中国の教育システム」を目の当たりにし、「ソ連のモデルの優越性」と「自分たち農業国の後進性」を認識した (212-213)。「自国の中学三年生よりもソ連の高校一年生の方が数学の学力が劣る」にも関わらず、ベトナムの社会の方が遅れているという苦い現実を認識したかれは、諸悪の根元が植民地教育システムの影響が残存していることにありと見え、学校教育の「政治化」の必要性を主張するようになったと、ニンは指摘している (*ibid.*)。かれは、「中国における労農教育の強調」に倣い、「労働者階級出身の新しい知識人階級の養成」を重視していく (*ibid.*)。そして、1956 年の教育改革以降には、「政治教育と技術教育の両方を結合させる」方向性が、教育システム全体の基調をなした。

一方で、高等教育のレベルにおいて、職業訓練学校の拡充が図られる。他方で、農民や労働者、末端レベルの党幹部を対象とする「補習教育 *Bồi túc Văn hoá*」が本格的に展開された。「補習教育」において強調されたのは、大衆の「社会主義の目的と方法論についての理解の低さ」を改善することである (226)。その「理解の低さ」によって、「農業や工業の発展がなかなか

進行しない」という問題が引き起こされていると考えられたのだ (*ibid.*)。そして、「政治教育」という名目により、「社会主義的労働、人民による統治や階級」という考えの強調 (227) がされる。

しかし、「政治教育」と「技術教育」を結合するという目的は、「補習教育」の場においても、高等教育の場においても、現実性のないものになっていく。高等教育の場において、「農民階級出身の生徒の数の著しい増大は、避けられてしかるべきであった。かれらは、合作社化の過程に必要な人材であったし、合作社化は、とくに地方において着手されたばかりであったからだ」 (221)。それゆえ、統計のうえでは、「労働者」や「プチブル／貧民」というカテゴリーに分類される学生の数が多かった (222)。このカテゴリーなどは、「多様な背景をもつ数多くのベトナム人が群れ集まった、植民地体制下の諸都市における流動的な世界を反映し、階級的な判別がつきにくいものになっていた」 (*ibid.*)。つまり、農民や労働者といった大衆たちのあいだから、「新しい知識人」を養成するという当初の目的が、有名無実化しているのである。さらに、「補習教育」においても、同様のカテゴリーの無効化が進行したことを、ニンは指摘している (231)。

1958 年前後を境とする文化政策や教育政策においては、以上のように、政治的に階級路線のイデオロギーが維持されるものの、社会の経

済的生産性を高める目的が優先されたために、階級に基づく諸カテゴリーの境界が曖昧になっていった。1965年から本格化した第二次インドシナ戦争において、人びとの大量動員を行うための「民族統一戦線方針のリニューアル」(235)がなされたのは、カテゴリーの無効化の過程で成立した「大衆」の社会においてのことであった。

おわりに—モダニティの経験を叙述することの意味

第2節で紹介してきたように、『変容する世界』の著者のニンは、本論において、1940年代後半から1950年代にかけて、ベトナムの社会がモダンに編成された歴史的な過程のただなかにあって、ベトナムにおける知識人たちの言説や、かれらの社会的なポジションが、「民族」や「大衆」というカテゴリー、そして「階級」という概念との関わりにおいて変遷していくダイナミズムを叙述している。彼女自身が明言しているわけではないが、本書は、1945年以前の「クリエイティブな知識人」たちの言説についてのデイヴィッド・マールの著作における議論を、さらに時代を追って展開させたものであるといえる³¹。彼女は、ベトナム国内における公式の文学史の枠組みを援用している³²が、そ

の枠組みを鵜呑みにすることなく、知識人の言説に限らない多岐に渡る文献や資料を読み直し、当時のベトナムの社会情勢を、リアルに描き直そうとしている。ここに、本稿第1節で取り上げた、「連続テーゼ」に対する批判的な意識を読み取ることもできる。しかし、彼女の叙述に、何の問題もないというわけではない。

たしかにニンは、植民地主義やナショナリズム、社会主義をめぐる知識人たちの議論や当時の社会情勢を、「モダニティ」の徴候を帯びるものとして巧みに描き直してみせている。しかし彼女は、それらの議論や社会情勢が孕んだ、いくつもの「モダニティ」の徴候について、内在的に意味を問い直すことはほとんど行っていない。たとえば、党の代表的なイデオログであるチュオン・チンが、1948年の「マルクス主義とベトナム文化の問題」において、論理的に破綻をきたしてまで「民族性」を維持したことが、政治的な実践や理論の生産に対して、どのようなインパクトを与えたのか。1948年の時点でのチュオン・チンの理論的姿勢と、1950年代の「神経過敏な社会」との関連性はあるのか。チュオン・チンの理論的姿勢と、トー・ヒウのポピュリズム的なそれとのあいだの共通性や相違点について、いかに読み解けばよいのか。あるいは、「革命の忠実な子どもたち」

であった「軍隊知識人」のひとりであるチャン・ザンが、「毛沢東主義者」であったと評価することによって、かれが残した言説の数々を、

³¹ David Marr, *Vietnamese Tradition on Trial 1920-1945*.

³² ニンは、たとえば以下の研究書を参照して、みずからの議論を展開している。Phong Lê, Vũ Tuấn Anh và Vũ Đức Phúc, *Văn học Việt nam kháng chiến chống Pháp (1945-1954)* (Hà Nội: NXB Khoa học Xã hội, 1986), Vũ Đức Phúc, *Bản vẽ những cuộc đấu tranh tư tưởng trong lịch sử văn học Việt nam hiện đại (1930-1954)* (Hà Nội: NXB Khoa học Xã hội, 1971).

当時のベトナムの社会情勢との関連において、どのように位置づけ直すことができるのか。そもそも、この時期のベトナムの知識人たちにとって、「毛沢東」はどのような人物として解釈されたのか。さらに、「1958年」以降に、階級主義に基づく諸カテゴリーが実質的に有名無実化していくなかで、「プチブル」や「労働者」、「農民」によって構成された「大衆」を成員とするベトナムの社会とは何だったのか。そして最後に、植民地支配から抜け出たばかりの、第三世界の、工業的な産業形態が皆無に近かったベトナムの社会において、社会主義という名の下に、紆余曲折を経ながら、各種各様の「モダニティ」が構想され、模索されていったことを、振り返って叙述することの意義は何か。『変容する世界』の叙述は、このように、大小いくつもの問いを喚起しはするものの、それらに対する答えまでは用意してくれていない。

それゆえ、本書は、本稿第1節で掘り下げて論じた、「モダニティ」をめぐる序論や結論における簡略な議論と、第2節で紹介した、その歴史的な展開をめぐる本論における議論とが、乖離してしまっている印象を読者に与えることになっている。つまり、一方で、「モダニティ」という大きな問題設定がなされながら、他方で、その問題設定のなかに、ベトナムにおいて歴史的に模索された「オルタナティブなモダニティ」を、現在という時点において叙述することの意味を、汲み取り切れていないのである。

しかし、『変容する世界』のこのような欠点は、また、本書がわたしたちに提供してくれる「成果」であるともいえる。なぜなら、本書の未消化の議論に対して、中国の思想史家である汪暉の次のような問題意識を重ね合わせることができるからである。「社会主義をとりまく世界の状況が変化するにつれて、多様なマルクス主義と社会主義との区別を語ることが可能になりました。また、批判的な理論とグローバルイゼーション＝近代化を寿ぐリベラルの理論との区別も語ることができるようになりました。グローバル化の過程に深く巻き込まれてしまった今、社会主義の批判力を今一度主張するためには、中国のなかに社会主義の破片を見つけだすのがよいかもしれません。つまりこの破片とは、現在の状況のなかで、オルタナティブへの靈感となったものです。過去には不完全な社会主義がありました。国家社会主義です。……（中略）国家全体にかかわる社会主義に固執するのではなく、社会主義の破片にこだわるものだから、批判力を持つのです。私はこういった批判が、台湾や香港から生まれてくるとは思いません。なぜなら、この批判は社会主義の歴史にあまりにも深くかかわっているからです。……（中略）人々が現実には生きているのは、たんなる理論ではなくて、社会主義の歴史の破片となった残り物を生きているのです。ですから、今日どんなオルタナティブがあるのかという問いに対して、私は、オルタナティブはここに

あるのだ、と言いたい。たんなる理論としてではなく、想像としてでもなく、歴史の経験として、歴史の実践として、全体性としてでなく破片として、ここにあるのだ、と。これらは、グローバル資本主義の新しい全体性に対して、批判的な資源となりつつあります」³³。汪暉の発言のなかの「中国」という言葉は、おそらく、「ベトナム」という言葉に置き換え可能である。『変容する世界』で展開されるのは、いわば、「社会主義の歴史の破片となった残り物」を拾い集める作業である。本書は、少なくとも、『モダニティ』というグローバルな条件」が世界を覆う現在において、それら「社会主義の破片」を「批判的な資源」として問う契機を、わたしたちに用意してくれているのである。

(ひらやま あきひろ・東京外国語大学大学院)

³³ 酒井直樹／劉健芝／ピーター・オズボーン／汪暉「インターナショナルイズムと『トレイシース』」(『トレイシース』第1号、岩波書店、2000年11月)、352頁。